

地域・離島歯科医療実習 レポート

学籍番号： 4315100204 氏名： 関 遥

実習先： 宝島・小宝島 実習期間： 令和元年 11月6日 ~11月13日

1. 自然環境

宝島

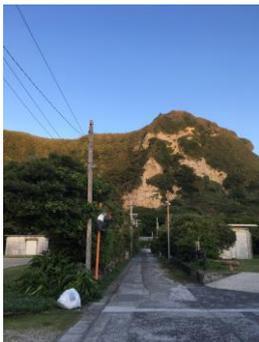
吐噶喇列島の有人島では最南端に位置し、隆起したサンゴ礁からなる島である。面積は 7.14 km²、周囲は 13.77 kmの、木々の緑と海の青さが美しい自然豊かな島である。空港はないため、週2便運行している「フェリーとしま2」を利用し鹿児島から 13 時間（鹿児島港からは 366 km）、奄美大島から2時間半（奄美大島からは 90 km）かけてのみ訪れることが可能である。集落は島の北岸の斜面にあり、港から山に向かう坂に民宿や郵便局、コミュニティセンターなどが建ち並んでいる。

亜熱帯性気候であり、夏季は暑いことが想像されるが、訪れた 11 月は北西の風のためか涼しく湿気も少なかった。トカラハブが例年より多く発生した様子で、木の枝に垂れ下がっているのを目にした。



子宝島

宝島の約 16 km北東に位置し、日本国内でハブ類が生息する北限である。面積は 1 km²、周囲は 4.74 kmであり、徒歩 40 分ほどで1周することができる。集落は港周辺に限局しており、集落と反対側は緑に覆われた石灰岩が変則的に乱立する幻想的な様相を呈すると同時に、牛が自由に闊歩する牧歌的な風景を楽しむこともできる。港はスカイブルーの絵の具をこぼした様な美しい海に開けているが、港湾施設が小規模であるために、気象・海象の状況により抜港となる場合があるという。接岸したとしても車両の搬入・搬出が不可能なことが多く、鹿児島県歯科巡回診療車である「こじか号」の上陸は、今回が2度目とのことであった。



2. 社会的背景

宝島

人口は 131 人で 68 世帯が暮らす。(2018 年 3 月 31 日現在)

民宿には建設業関係者が多く滞在しているのと同時に、豊かな漁場やダイビング等のマリンスポーツを求めて都会からも観光客が訪れており、どこも島内は予想より賑やかである。観光以外にもバナナ繊維から作られる紡績布や島バナナのコンフィチュール等、特産品を利用した新たな産業にも着手しており、今後の拡大が期待されている。島内には平成 24 年に開設された小規模多機能型居宅介護施設である「小規模多機能ホームたから」があり、高齢者の生活を支援している。

子宝島

人口は 53 人で 32 世帯が暮らす。(2018 年 3 月 31 日現在)

未就学児や小中学生には、島に来られた教員方の家族や、離島留学を利用して訪れている生徒達も含まれる。小宝島小中学校には、小学生 5 人、中学生 4 人に対して、教職員が 10 名と ALT が 1 名在籍していた。子供のなかには、島に赴任した教員のご家族や、離島留学を利用し訪れている生徒達もいた。教育環境としては県内でも充実していると言える。この為か生徒たちは勉強に熱心であるように思われた。宿泊施設は 3ヶ所あり、建設業関係者や釣りを目的とした観光客が滞在する。また、保育所と老人ホームが併設された小規模の施設が建てられ、ホームには現在 6 名の方が入所されている。

3. 住民の生活

宝島

集落の中心部に公衆浴場として温泉があるが、湧き出す温泉の温度次第で、営業したりしなかったりするらしい。港から坂を登ったつきあたりにコミュニティセンターがあり、併設されている売店は朝と夕方 2 時間のみ営業ではあるが、冷凍の魚や飲料品から文房具や日用品まで、品揃えは充実していた。通りを挟んだ売店の向かい側には新しくガソリンスタンドが設置され、これにより以前より生活が便利になったのではないかと考えられる。



子宝島

小中学校の近くに自動販売機が 1 台あるのみで、島に商店はない。日用品や食料品の入手経路は、最

近では専らインターネットが利用されるということであるが、船に100%依存した供給経路であるために、台風や時化などの際のご苦労は想像に難くない。吐噶喇列島の中で最も小さな島であり、自然の影響を強く受けることもあるが、小中学校からは笑い声が響いており、明るい雰囲気は漂っていた。海辺には湯泊温泉とマシヨの湯という2つの露天風呂があり、島民の憩いの場となっている。以前は他にも湯治場が存在したが、温泉がピタリと出なくなってしまうようである。滞在中に、小中学校で後日催されるマラソン大会の試走が行われていた。島内放送で試走のスタートがアナウンスされ、島の1本道を駆ける生徒たちに、島民から「頑張れ」と声援が飛んでいた。



4. 医療供給体制

宝島・小宝島共にへき地診療所があるものの、医師は常駐しておらず、鹿児島赤十字病院の医師が各島に月2回が巡回している。その他、鹿児島子供病院による小児診療や鹿児島大学による眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科も、歯科に同じく特定診療科として診療が行われている。看護師は宝島に1名、小宝島には2名常任しているが、小宝島の看護師1名は1ターンで移住して来られた方である。介護については、「島民が住み慣れた島でいつまでも生活できる村づくり」を目標に、先述のように両島に老人ホームが開所し、高齢者の生活支援が行われている。

歯科診療に関しては、巡回診療以外の機会としては、鹿児島市や奄美大島を訪れる際に歯科医院に受診している方が多数であった。義歯の新製や慢性的な歯周病など継続した受診が必要な場合でも、歯科医院に頻繁に受診出来ないということが最大のネックになっているように感じる。小児では、全体的に口腔内環境が良く、歯科受診の度にフッ素塗布を行うなど予防に対する意識が高いことが伺われた。



実習概要

日付	内容
11/6(水)	23時鹿児島港出港
7(木)	12時宝島着 民宿にて昼食の後、コミュニティセンターにて設営・診療開始
8(金)	午前・午後診療 同日にインフルエンザ予防注射あり
9(土)	午前・午後診療 16時から機材片付け
10(日)	小宝島へ移動 診療所横公民館で診療準備・設営の後9時に診療開始
11(月)	午前・午後診療
12(火)	午前・午後診療
13(水)	6時小宝島港出港 18時鹿児島港入港

振り返り記録

今回の実習での診療内容は、義歯調整やコンポジットレジン充填が主であったが、臨床実習に上がり初めての抜歯も見学することができた。

小児の患者では、おそらく離島在住であるということ強く意識してか、フッ化物の塗布を歯科受診の度に行っており、近隣の歯科を容易に受診できる子供達より、予防の重要性に対する認識が深いご両親が多いと感じた。成人の治療で印象的だったのは、義歯の調整が終わり義歯を問題無く使えるようになったという患者さんが、「入れ歯がちゃんと使える」「痛くない」ととても感動しておられたことだ。眼鏡をかける人間にとって眼鏡のない生活は苦痛以外の何物でもない。義歯を使用する方には義歯は体の一部であり、義歯のない生活は必要以上の困難を強いられる。義歯を使用するにあたり印象採得から完成まで、足繁く歯科に通うことのできない環境では、義歯に少しの不具合がでるだけでも生活に大きな支障をきたしそれが長期間持続することになる。止むを得ない状況で臼歯の抜歯を行った際も、すぐに義歯作製をすることも可能ではなく、日々の食事に困難を伴うようになるだろう。現代社会を生きる上で日常的に容易に可能なことが、必ずしも可能ではないことを実感した。

現在島への歯科の巡回は年2回である。実習参加前は、年2回と言わず歯科診療の巡回の回数を増やせば良いのでは、と疑問を持っていたが、実習に参加し、少しの診療を行うだけでもどれ程の機材が必要なのか考えが至らなかったことに気付かされた。またその機材を運ぶだけでもかなりの労力が必要であり、限られた環境の中で診療を行う難しさというものを強く実感した。

我々が日々生活する上で、自分がどれほど恵まれた環境にいるかを明確に感じることは少ない。コンビニもなく、海が時化する度に物流がストップし手元にあるものだけで生活をしなければならないという不安は我々にはない。歯科診療のことだけでなく、日常生活のあり方も考えさせられた実習であり、歯科診療の重要性や歯科医師としての見聞や知識・経験の必要性等を再度認識させられた貴重な体験であった。

今回離島実習の機会を与えてくださった南先生、同行させて頂いた諸先生方、鹿児島県歯科医師会の野口さんと衛生士の方々、今回の診療実習でお世話になった島民の方々に、貴重な体験をさせていただきましたこと心より感謝申し上げます。

